

第二十四回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

中畑正志 著『魂の変容 心的基礎概念の歴史的構成』

(2011年6月28日 岩波書店 刊)

中畑正志 なかはたまさし 1957年8月12日生まれ。長野県上田市出身

西洋古代哲学、心の哲学を専門とする。

京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科指導認定退学、都立大学助手、九州大学助教授、京都大学助教授を経て京都大学大学院文学研究科教授。

主著に『いま〈哲学すること〉へ』(岩波講座哲学01 共著、岩波書店)、『イリソスのほとり』(共編著、世界思想社)、『アリストテレス 魂について』(訳、京都大学学術出版会)、

### 受賞のことば

この本で私は、対象、感情、想像などの日常でも使われている基本的な概念がどのように成立し、どのような思考がそこに織り込まれてきたのかを明らかにすることを試みました。その作業をすすめるうえで、伝えられる具体的な言葉をできるかぎり尊重するようにつとめたつもりです。

「文献学(フィロロジー)の発達が哲学の発達に不可欠」であり、「将来の日本を担う若い学徒がこれらの学問の間の親密な連関に留意し、在来のようなちぐはぐな歩き方に甘んぜられないことを希望してやまない」——このように和辻哲郎は述べています。もちろん私が本書でおこなったことが文献学の名に値するものでないことは、自覚しています。しかし、このような精神から探究した知の巨人にちなんで賞をいただくことは、私の歩みが「ちぐはぐ」ではなかったと認められた気がして、とても勇気づけられます。もう少しこの歩調で知の歴史の探索ができそうです。ありがとうございました。

### 《選考委員評》

加藤 尚武

中畑正志『魂の変容』(岩波書店、2011年)は、アリストテレスの「魂について」の考察が、現代の哲学的な課題や潮流とつながりを持つことを、綿密な文献学的な実証と独創的な視点の導入によって、明らかにした学術的著作として、世界的な水準に照らして貢献を認められる業績です。

哲学で使われる言葉の多くを、西洋ではギリシャ時代からめんめんと使いながら伝えて来ていますが、私たち日本人だけでなく西洋の現代哲学者も「近代の思想は古代の思想よりも優れているはずだ」という思い込みから、近代の哲学者が書いた西洋哲学史の記述を鵜呑みにしてギリシャの古典から直接に言葉を読み取ろうとはしないことが多くて、そこから、さまざまの誤解が作られています。

そういう誤解を、すべて古典の用語例を丹念にたどり直すことで、訂正するという仕事を  
中畑さんはしてくれました。それによって分かったことは、古代ギリシャの哲学者も現代の  
哲学者も同じ問題を、同じように扱っているということです。

中畑さんはアリストテレスの「魂について」という著作の翻訳者でもあります。この「魂  
について」という一冊の本が、現代に直接つながっていて、私たちは現代の哲学者から学ぶ  
以上に、アリストテレスから学ぶことが多いということを、私たちに分からせてくれました。

自然を観察して得られる知識によって心の状態や内容などはすべて説明がつくはずだ  
という立場は、自然主義と呼ばれます。心は自然を観察して得られる知識では説明され尽くす  
ことはないのだという立場は、非自然主義と呼ばれます。西洋の哲学では、この問題が、ギ  
リシャ時代から現代までさまざまな姿を変えて議論されてきました。

古代から現代にまでいたるすべての基本となる文献を照らし合わせて、いま下すことので  
きる結論を無理のない形でまとめることが、中畑さんの『魂の変容』の最後の部分での成果  
です。難しいけれど避けて通ることのできない書物です。

### 関根 清三

本年度の受賞作、中畑正志氏の『魂の変容』は、心の概念の諸相を歴史的に洗い直し文献  
学的に精査したお仕事である。我々は心の働きを外界から独立の、内的かつ能動的な働きと  
考えがちだ。しかしむしろ心は本質的に外界と関わっており、そこからの働きかけを受容す  
る受動的なものだという捉え方も、古くはアリストテレスの魂についての理解に見出される。  
そうした理解が、現代の心の哲学の展開のために、示唆的となるのではないか。本書はこの  
ような基本的な問題意識を、プラトン、アリストテレスからブレンターノを経て現代に至る  
概念史をたどることによって様々な角度から検討した、五つの論文の集成である。

生命に根差したアリストテレスの魂理解は、心身一元論的なヘブライズムの理解とも通底  
する古代的な人間観を前提としているようにも見え、今日の我々にどこまで説得的であり、  
現代の心の哲学の構築のために具体的にどう裨益するのか、その辺りについても著者の見通  
しを伺いたかった気がするが、心にかかわる基本用語の複雑多岐にわたる生成の過程を、独  
自の視点から整理する基礎的な御労作として、その学殖と着眼に、心から敬意を表したい。

なお選考委員会では、伊達聖伸氏の『ライシテ、道徳、宗教学』の評価をめぐっても議論  
が白熱した。伊達氏のお仕事は、一九世紀フランスにおける様々な世俗化（ライシテ）の潮  
流が、如何に複合的に宗教道徳を再編していったかを明らかにする。そのために、思想的に  
は現代に忘れられた政治家達の考え方や行動も詳しく分析され、また当時の道徳の教科書や  
生徒の記したノートに至るまで精細に読み解かれる。ライシテにかかわる思想史上のビッグ  
ネームにしても、コント、ルナン、デュルケム、ベルグソンらの思想の全体像を概観し、そ  
の研究史の勘所を押さえ、その上で当該テキストの創見に富む読解を呈示し、その思想の本  
質と現代的意義について評価をくださる潔さに、選者は深い共感を覚えたことを付言しておき

たい。

黒住 真

近代日本の哲学は、欧米の近代哲学との関連が大きい。多くの日本の学者は、ギリシア哲学を捉え、またデカルト（1596-1650）以後の哲学を追って行く。より現代については、たとえばヨーロッパにおけるフッサール(1859-1938)また彼に仕えたハイデッガー(1889-1976)といった二十世紀前半の学者に深く踏み込み、肯定・否定ともかく彼らから大きな示唆や影響を得る。そうした近代哲学的な流れが日本では一般に大きかった。

とはいえ、そのフッサール自身は、実は先立ってブレンターノ(1838-1917)の方法を学んでおり、そのブレンターノは、ギリシア哲学のみならず、中世哲学をも遡及し、トマス・アクィナス(1225-1274)を高く評価しながら、みずから位置づけた哲学者なのである。近代日本では見えにくいだが、西欧の近代哲学の形成には、実は先立つ古代ギリシアから新プラトン主義、教父・中世哲学といった流れが深く孕まれている。ならば、哲学者たろうとするならば、その歴史を少しでも論理的にまた物事の本質に向けて辿る必要がある。その体験を担うことで、哲学は実際まさに生きたものとなるだろう。

哲学はそもそも人の心・魂における理性的な論理・認知だと考えられる。その哲学は、西洋では、ギリシアにはっきり現れ、さらに中世において大きな課題や問題を生じる。ただ、日本では従来、その中世に向けての歴史的遡及はあまり行われず、哲学史は、前近代中世等は、ただ紹介の列挙にとどまる傾向すらあったようだ。これに対して、中畑正志氏は、従来の哲学史の空白を越え、みずから「歴史を振り返り」「追思考する」という。まさに「系譜を具体的に確かめる」仕事をおこなう。その把握が、文字通り本書のタイトル『魂の変容：心的基礎概念の歴史的構成』になっている。指摘される心、魂、subject-object といった概念の変容史は、哲学の基礎を歴史的に問い示し、私たちを更に思考させ続けている。

豊かな示唆が含まれる本書の具体的内容は、ここで十分述べることは出来ない。ただ、古代哲学の専門家である中畑氏が、二十世紀半ば以後英米で展開している分析哲学・心の哲学などを古代・中世哲学と共に論じていることは、グローバルな現代日本にあつての哲学がまさに示されており、とても喜ばしい気持ちを私は懐いた。と同時に、中世哲学に向けて展開する、自然観、ペルソナ論、神・霊魂実在論とキリストの問題等々、西田幾多郎(1870-1945)が少しだけふれ、岩下壮一(1889-1940)以後の中世哲学者たちがさらに調べ考えていたアウグスティヌス(354-430)やトマス周辺にある諸問題も、さらに辿りより示してほしいが、それらの前の学問に身を止められているようにも私は思った。ただ、もちろんそれらは本書自身の課題ではないのだろう。

本書には重要な可能性が含まれ示されている。その哲学また心・魂の学問の歴史が、今後、一般の人々に判りやすい形で、さらに展開され表現されることを心から願っている。